

このごろ、よく耳にする「Z世代」。聞きなれた言葉ではあるものの、そもそもどうしてZ世代というのか知らなかったのが調べてみたところ、Z世代とは一般的に「1996年～2010年ごろにかけて誕生した人たち」とされています。その前は何と呼ばれていたのか。なんのひねりもなく、「Y世代」でした。私もY世代に属しますが、子どものころからY世代と呼ばれた記憶はありません。単に無知だったのかとも思いましたが、それよりインパクトある言葉がちゃんとありました。「ゆとり世代」や「ミレニアル世代」です。たしかに、これらの言葉はよく耳にしました。では、この次の世代は・・・という、アルファベットが「Z」で終わってしまったので、「α(アルファ)世代」と言うそうです。

こうして、年代によって世代の名称を分ける背景には、その時代に起こった出来事が起きた人間活動に及ぼす影響を様々な学術的分野において研究されることがあるそうです。人々の嗜好や消費、行動の傾向を把握できるため、ビジネスにも応用できます。

世代によって変化するといわれるものの一つに「価値観」があります。価値観の多様化とも言われるように、Z世代のキーワードの一つは「ダイバーシティ(多様性)」です。つまり、これまでのように「周囲と同じ」ではなく、「自分らしさ」を大切にしている傾向が強いです。同時に、SNSが当たり前のコミュニケーションツールになっているため、「面白いと思ったことや感動を共有したい」「自分の考えや行動を受け入れられたい」という承認欲求も強い傾向があります。

一方で、大切にしたいはずの「自分らしさ」がどんなものなのか分からずに悩む人も多いようです。自分のよさは何なのか、自分はどんなものに価値を置いているのか、なんとなく感覚的に分かっているつもりでも、自分でもよくわからないケースも多々あります。その不安が「自分にはよいところがない」と思ったり、少しうまくいかないことがあると、「どうせ自分には無理だ」などと自分を否定してしまうことも少なくありません。

こういった人たちを支えることはできないのかを模索した結果、学び始めたのが素質論です。自分や相手がどんな価値観を大切にしているのかを知ることが、多様な価値観をもった人たちの中で自分らしく生きることができるようになると信じています。急激に変化し続ける時代だからこそ、時に合う生き方をしていきたいものです。

一流と二流の差 令和の時代の育成法

横田 いまはどの世界でも厳しく指導をすることが難しい時代になりました。私の師匠が常々言っておりましたのは、「修行僧というのは麦を踏むのと一緒だ。踏めば踏みつけるほど強くなる」。この信念でしたから、もう完膚なきまでに相手を否定するんですね。

栗山 師匠からどんなふうに指導を受けるんですか？

横田 「もう一回、一からやり直せ」とか「そんなことじゃ、いままで何やってきたか分かんないな」とかですね。全否定されてそこからまた修行を繰り返していく。

でも、このやり方はもうダメです。踏んだら何も出てきません。いまはいかにして芽を育てるか、時には添え木をしながら、丁寧に育てていかないといけない。

ですから、よく若い修行僧たちに伝えているのは、『論語』のこの一節です。「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」。監督も著書の中で引用しておられましたね。とにかくいまやっていることを楽しむ。その楽しさをどう教えられるかということにいま私は努力しているところなんです。

栗山 修行=苦痛ではなく、修行=楽しいという価値観を育む。

横田 修行する人たちが減ってきている中で、座禅にしても強制的に座らせるのは一番簡単なんですけど、それだと単なる我慢大会になって、座禅嫌いになってしまう。

お寺の跡取りに生まれて、いずれは継ぐと分かっているにも拘らず、修行道場に来るまで座禅をしたことがないという人もいます。「君はいままで何をしてたのだね」とこう言いたいんですけど、グッと呑み込んで、無理矢理に足を組ますのではなくて、どうやったら股関節をほぐすことができるか、苦痛なく座ることができるか、ヨガの先生に習ってきたりして体の骨格や筋肉について勉強しましてね。それがまた結構楽しいんです。

まず自分楽しむことが大事だと思っていますし、いまはやっぱり楽しむということから教えていかないと、若い人たちがついてこれないと感じています。

栗山 (中略) 若い選手たちの多くは「できるか、できないか」という考え方をします。できないからやらない。いまできなくても、やってみたらできるかもしれないという発想がない。できないことをできるようになるから嬉しいんですけどね。

一流になる選手は「できるか、できないか」ではなく、「やるか、やらないか」というふうに考えています。仮にやってみてできなくても、そこに挑戦していけば自分のレベルが高まるんです。

その差は何かというと、最終的には自分の中でスイッチが入っているか。いろいろな人からヒントはもらうんですけど、最後は誰も教えられないと思います。自分で考えて自分で決めて自分でやって自分でうまくいった。自分でしかスイッチは押せないんですよ。

『人間学を学ぶ月刊誌 致知 特集 出逢いの人間学 栗山英樹&横田南領』